

令和2年度特色入試問題

《文学部》

「学びの設計書」に関連する論述試験

「学びの設計書に関連する論述試験及び提出書類」についてA～Cの3段階評価

(注 意)

1. 問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。
2. 問題冊子は表紙のほかに3ページある。
3. 解答冊子は表紙のほかに2ページあり、そのうち「ます目」の部分が解答欄である。なお、別の下書き用紙2枚を配布する。
4. 試験開始後、解答冊子の表紙所定欄に受験番号・氏名をはっきり記入すること。表紙には、これら以外のことを書いてはならない。
5. 解答はすべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。
6. 解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。
7. 解答冊子は、どのページも切り離してはならない。
8. 問題冊子および下書き用紙は持ち帰ること。解答冊子は持ち帰ってはならない。

問 次の文章を読み、そこで述べられている人文学の理念についてどう考えるか、あなたが学びの設計書に書いたことと関連づけて述べなさい。(800字以内)

「人文学」ないしは「人文科学」に対応する英語は“the humanities”であり、自然科学 (natural sciences) や社会科学 (social sciences) とは違い、「科学 (science)」の名は冠せられていない。そもそも「科学」という日本語は、「分科の学」や「百科の学」に由来する明治期の造語であり、専門分化した「個別諸科学」を意味する。すなわち、「科学」は学問分野を表す可算名詞の複数形“sciences”に対応する訳語である。他方で知識を表す不可算名詞の“science”は、経験的方法（実験や観察）に基づいて実証された体系的知識を意味し、その含意はむしろ「理学」という訳語のなかに残されている。すなわち自然界を支配する「理（ことわり）」を明らかにする法則的知識である。

いずれの意味にせよ、人文学は「科学」や「理学」のカテゴリーには属さない。そのことは「人文」が「天文」に対立する言葉であることから明らかであろう。すなわち、「天文」が天体に関わる自然現象を指すのに対し、「人文」は人間社会に関わる人間的事象を指す言葉だからである。方法的にも天文学が天体の運行法則を解明する分析的方法をとるのに対し、人文学は人間の全体性に立脚することから、その方法は総合的であらざるをえない。それゆえ「人文科学」という形容矛盾とも見える呼び名は、おそらく近代日本における高等教育のカリキュラム編成上、自然科学や社会科学と平仄を合わせるために作り出された言葉だと思われる。

わが国で狭義に「人文学」と言われる場合には、俗に「哲・史・文」と称される哲学、歴史学、文学など、文献学 (philology) を基盤とする学問分野を指して用いられている。それに対して、「人間科学 (human sciences)」という呼称が使われる場合は、心理学、社会学、文化人類学などに加え、政治学や経済学など社会科学の一部も含まれるようである。また、かつては人文学の中核を占めていた神学や修辞学（雄弁術）は、現在では周辺部に追いやられている。さらに哲学と隣接した分野であった心理学は、今日では自然科学に準じた実験的方法を導入しており、むしろ認知科学や脳科学と最も近い分野となっている。したがって、現在の人文学の境界はいくぶん曖昧なものとならざるをえない。ここでは「人文学」という名称を厳密に定義することはせず、大まかに大学の文学部や人文学部で教育・研究がなされている学問分野を指すものとして用いることとしたい。

哲学、歴史学、文学を中心とする学問がとりわけ“humanities”と呼ばれたのは、ルネサンス期に活況を呈したギリシア・ラテンの古典研究とそれに並行す

る「人間性の探求 (humaniora)」に由来する。したがって、それは人間性の価値と尊厳を基調とする思想潮流、すなわち人文主義 (ヒューマニズム) と密接な関わりをもっている。フランス・ユマニスムの研究で知られる渡辺一夫は、ルネサンス期の「自由検討の精神」が、異端 (hérésie) や懐疑主義 (scepticisme) とも通じることに触れ、その精神をもってギリシア・ラテンの異教的な「いちだんと人間らしい学芸 (litterae humaniores)」に沈潜し、それを武器に既存のキリスト教会の固陋ぶりや護教的な聖書研究の歪みを批判した人々の業績について、次のように述べている。少々長くなるが引用しておこう。

これらの人々は、通例ユマニスト (ヒューマニスト) humaniste と呼ばれます。そして、これらの人々を中心にして、単に神学や聖書学の分野のみならず、広く学芸一般において、自由検討の精神により、歪められたものを正し、<人間不在>現象を衝いた人々の動きが、ユマニスム (ヒューマニズム) humanisme と呼ばれるようになったように聞いております。ちなみに記しますが、humaniste という語は、先に記しました litterae humaniores (いちだんと人間らしい学芸) という言い方と深い関係があり、すでに一六世紀 (フランスのルネサンス時代) にはフランス語として用いられておりましたが、humanisme という字の方は、一九世紀になってから、ルネサンス期の新しい思潮を貫くものに対して与えられた名称なのです。

従ってユマニスム (ヒューマニズム) という字は、単に博愛的とか人道的とかいう意味にのみ用いられるよりも、人間が自分の作ったもの、現に自分の使っているものの機械や奴隷にならぬように、歪んだものを恒常な姿に戻すために、常に自由検討の精神を働かせて、根本の精神をたずね続けることにほかならないのではないかと考えております。(渡辺『フランス・ルネサンスの人々』一九七九、一八頁)

ユマニスム (ヒューマニズム) という言葉が、今日のような「人道主義」を意味するものではなく、もともと「自由検討の精神」に基づいてキリスト教会をはじめとする既存の権威や硬直した制度を批判し、人間性を取り戻そうとする運動を指していたことは銘記されてよい。それはこれからの人文学の役割を考えるうえでも、貴重な示唆を与えてくれるからである。

だが、ギリシア・ラテンの古典を復興し、それを基盤に人間性の探究を進めた人文主義の運動は、その「自由検討の精神」の帰結として一七世紀ヨーロッパにおける一大知的変革、すなわち「科学革命」への道を拓くこととなった。これはいささか皮肉な出来事と言わざるをえない。それというのも、人文知はそれ自体が母胎となって生み出した新たな知、すなわち科学知によってやが

て凌駕されるにいたるからである。

科学史家のジョン・ヘンリーによれば、ルネサンス期の人文主義者たちは「人間の尊厳」を重んじ、従来の「観想的生」に代わる「実践的生」の理想を追求し、「公共の福祉」のために生きることを目指した。そうした生活態度は、次第に知識を人間生活の改善に結びつけようとする意識を生み、知識の「有用性」を重視する姿勢へとつながっていく。それゆえヘンリーは次のように結論する。

こうして、科学革命の起源には、人文主義者の改革思想が主要な地位を占めていると言わざるをえない。科学革命の特徴を三つあげるとすれば、それはまず自然的世界の働きを理解するのに数学を用いること、真理発見のために観察と実験とを行うこと、そして（それまではどちらかという価値の低い数学的職人や魔術師しかもっていなかったような）知識の有用性という考え方を、自然的知識にまで広げる、ということである。どの特徴も知識の世界に根づくには、ルネサンス人文主義が必要であった。(Henry 2002/邦訳『一七世紀科学革命』、一七頁)

ここで科学革命の特徴として数学の使用、観察と実験、知識の有用性、の三項目があげられ、これらが浸透するにはルネサンス人文主義が必要であった、と指摘されていることははなはだ興味深い。これら三つの特徴は、いずれも自然科学の成立には不可欠であっても、それまでの人文学には欠けていたものだからである。それゆえ、科学革命を経て成立した自然科学の知識は、いずれの領域でも、伝統的な人文学の知識に対抗するために、「新しい知」であることを強調した。ケプラーの『新天文学 (Astronomia nova)』(一六〇九年) しかり、F・ベーコンの『新オルガノン (Novum organum)』(一六二〇年) しかり、そしてガリレオの『新科学対話 (Discorsi e dimostrazioni matematiche intorno à due nuove scienze)』(一六三八年) またしかりである。つまり、ルネサンスの人文主義者たちが古代の文芸を尊重し、それを復興させようと心を砕いたのに対し、新たに登場した自然科学者たち(「科学者」という呼称は一九世紀半ばのものであるが)は、アリストテレスをはじめとする古代の知的権威に挑戦し、それに基づく自然観を克服することによって、「新しい知」を確立しようとしたと言えよう。

(『シリーズ大学4 研究する大学——何のための知識か』岩波書店、2013年所収、野家啓一「人文学の使命——スローサイエンスの行方」より。一部改変)